

2 評価委員による評価

○小橋委員

令和6年度に千葉市教育委員会が執行した学校教育に関わる事務について、総括的所見（全体について）、重点項目の所見（スクールメディカルサポート事業、教頭マネジメント・サポーターの配置）について意見を述べる。

全体について

第3次千葉市学校教育推進計画について、報告書を元にその内容及び進捗状況の確認をした。令和6年度の学校教育施策の進捗については、「遅れ」の箇所も散見されるが、それへの対策も立案や講じていることが読み取れる。それぞれの項目において、分析の視点や対応策の検証をしつつ、場合によっては項目の適切さも検討しつつ、経過を確認してほしい。また今回の重点項目とも関連するが、報告書にある各項目からも分かるように、学校の中での職務は多様で多くの種類と量がある。教育上の新しい課題は多々あるが、働き方改革のバランスをとりながら、正規職員・非正規職員の別に関わらず個人に仕事が集中し過ぎないように、職員の数、仕事内容の質や量、その時々状況もふまえ精査を行い、各職員の生活の質の保障も含めて施策内容の検討や、実施をしてほしい。

スクールメディカルサポート事業

推進計画6-4「切れ目のない支援体制の構築」にあたる施策の一つである事業について、千葉市立千草台東小学校（児童数：177名9学級）の視察を行った。平成28年からスクールメディカルサポート事業がスタートし、医療的ケアを必要とする児童生徒に対し、看護師（スクールメディカルサポーター）を配置している。また令和4年からはスクールメディカルアドバイザー（SMA）の役職が置かれた。視察では児童に医療的ケアを行っている様子を見学し、養護教育センター、看護師、及び小学校管理職からこれまでの活動の説明を受けた。

（1）成果

SMA（全体を統括）は、各看護師の状況を把握し、各児童生徒のケアが抜けることがないように采配し、医療的ケアが終了後の児童生徒の対応や、各看護師の相談等も行っている。看護師配置だけではなく、SMAの存在も、スクールメディカルサポート事業において重要な役割を担っている。千葉市において、医療的ケアが必要な児童生徒に全て対応ができているという現在の状況をつくっているのはそのためといえるだろう。

各看護師は、医療的ケアを行う時間だけでなく、教職員を通して学校内外と連絡や協力が必要なことも多い。視察では看護師が学校を把握し、教職員と連携がとれることが、ひいては学校で生活する児童生徒本人、教員や保護者の安心感を生むことに繋がることを確認された。現場の意見を聴取しつつ、今後もよりよい形で継続してほしい。

（2）人材の拡充とサポートの可視化

医療的ケアの必要な児童生徒が学校にいる時間帯には、ケアの内容によって児童生徒一

人につき一人の看護師が必ずつく。ケアの内容は個々人によって異なり、また児童生徒の成長に合わせて対応方法の変化もしていく。職務内容は（１）にあるようにケアだけではないが、看護師が体調不良などにより勤務につけない際の、代替人員の余裕がない状況が見られた。要請があれば実働可能な待機看護師の確保も今後の課題だろう。それは児童生徒の安心感と共に、職員自身が安心して継続し勤務していくことにもつながるのではないだろうか。また現在、スクールメディカルサポートの説明リーフレット作成の企画があると聞く。医療的ケアが必要な児童生徒本人、保護者、在籍する学校の職員、看護師等、広く関わる人たち自身の理解の一助ともなるだろう。是非、実施内容と共に、各所や人との連携等も分かるような資料を作成していただき、活用してほしい。

教頭マネジメント・サポーターの設置

推進計画４－２「学校における働き方改革の推進」にあたる施策の一つについて、千葉市立真砂中学校（生徒数：573名、学級数21）の視察を行った。千葉市立の小・中学校での副校長・教頭の時間外在校等時間の平均は、他の管理職や教員を抜いて長時間の59時間となっており、その仕事内容も多岐に渡る。千葉市では現在、時間外在校等時間の上限の目標を45時間と設定しているが、副校長・教頭の時間外在校時間が80時間となっている学校のうち、いくつかの条件を考慮し4校にサポーターの配置を行っている。

視察校では、管理職及びサポーター、学事課よりこれまでの経緯や現状の説明を受け、サポーターの勤務場所の見学を行った。視察の中学校は夜間中学校が分校として併設されており、また教育相談指導教室や不登校支援のライトポート設置等で地域の拠点校ともなり、それらの連携や調整等も管理職の業務の一つとなっている。

（１）サポーターの拡充に向けて

視察校ではサポーターが入ったことで、校内で教頭が対応する事案でも優先度合の高いことに重点的に対応できるようになったこと、また校内の教職員の事務が円滑に動くようになったこと等が分かった。また教頭とサポーターの連携が円滑にいくような日常からのコミュニケーションや、双方が仕事をする場所の配置の工夫があることも確認された。現在、市ではサポーター配置の効果検証もしているところとも聞く。視察校ではよい効果が認められるといえるだろう。

（２）各学校の状況の把握

今回の視察での対話の中で、小学校と中学校が求める内容や、学校の所在する地域やその時々学校の様子によっても、求める仕事内容の種類や重点事項も異なることが見えてきた。事務上のサポートが必要な場合もあれば、生徒指導に関するサポートが必要な場合もあるだろう。市では学校事情を聴取した上で、サポーター配置をしていることは確認できたが、今後も配置をする際には、引き続き学校の事情を把握し、その学校の状況に合う人材の配置をしてほしい。また、学校では突発的なこともあり4月からではなく途中からのサポート要請も考えられる。今後、拡充を考えていく場合は、柔軟な予算措置と配置計画を合わせて検討してほしい。

○岩崎委員

令和6年度千葉市教育委員会が執行した生涯学習関連事業に関わる事務について、以下、総括的所見（全体について）、及び重点評価事業として、千葉市科学館における「科学教育の推進」と埋蔵文化財調査センターにおける「縄文文化などへの理解・関心の向上」の二つに焦点をあてて評価に関わる意見を述べる。

総括的所見（全体について）

生涯学習関連事業は、市民が学びを通じて健康で文化的な生活を営むための環境基盤を整備することを目的として実施されている。千葉市では、図書館、生涯学習センター、公民館などが整備されており、物理的環境は一定水準以上に充実していると考えられる。

「第6次千葉市生涯学習推進計画」では、学びの活動と地域をつなぐコーディネーターとしての人材の重要性が指摘されている。公民館を身近な地域拠点と位置づけ、社会教育主事有資格者など専門的知見を持つ人材をより一層活用していくことが求められている。生涯学習センターや公民館に限らず、すべての施設において、専門性を備えた適切な人材の配置は、生涯学習施策を進める上での重要な鍵となる。

今回視察した千葉市科学館および埋蔵文化財調査センターでは、学術的知見を有する専門家が常駐し、講座の企画や知識の普及活動に従事している。このことは、プログラムや展示の質を維持するうえで大いに評価される点である。

人材の登用・育成については、引き続き「第6次千葉市生涯学習推進計画」に基づき、生涯学習環境整備の一環として、さらに推進されることが期待される。

科学教育の推進

千葉市科学館は、立地の良さと充実した企画により、子どもから大人まで多くの来館者を集めている。多くの自治体に科学館は設置されているが、千葉市科学館において特筆すべきは、市が「科学都市戦略」に基づき、「子どもから大人まで、すべての市民が日常生活の中で科学・技術を身近に感じられる科学都市の創造」を理念に掲げ、科学館を知識の普及・啓発の拠点として位置づけている点である。

このような戦略と計画が明示されていることにより、目指すべきビジョンが明確になり、それを実現する道筋が体系的に示される利点がある。また、行政、市民、企業、NPOなど多様な主体が協働する基盤として「科学都市戦略」が策定されている意義は大きい。

科学館では、子ども向けプログラムの開発に教員経験者がスタッフとして関わり、学校教育における科学館の活用方法や展示のわかりやすさへの知見を提供している。また、大人向けプログラムとして、卓越した学問的見識を有する館長が「大人が楽しむ科学教室」の企画に参画し、年間約40回の多彩な講座を開催している。科学館全体が学習する組織として機能し、スタッフが実践共同体として研鑽を積んでいる点は高く評価すべきところである。

市民が直接参加できない場合でも、「大人が楽しむ科学教室」のテーマが広報を通じて発信されることで、市民の知的好奇心を喚起する契機となる。また、「大人が楽しむ科学教室」の対象は高校生以上となっており、高校生にとっては学問知識の広がりや進路選択

において有益であることを考えると高校生の参加を促す一層の働きかけも期待されるところである。

さらに、生涯学習イベントとして毎年秋に開催される「千葉市科学フェスタ」も高く評価できる。実行委員会に多様な団体が参加し、「科学都市戦略」に参画することで、科学館を支える地域ネットワークが形成されている。中でも、「千葉オンリーワン企業」と呼ばれる、独自の技術や製品を有する市内企業に焦点を当てた企画展示は、産業振興と市民理解の促進につながる取り組みであり、千葉市が「科学都市」と呼ばれるにふさわしいものといえる。

科学館のプラネタリウムは、2025年1月にリニューアルオープンし、天の川を構成する恒星の表示数が1千万個から1億個に増加し星の明るさや色彩の表現がより高精細化された。赤ちゃん連れの親子、児童、生徒、大人といった幅広い層を対象とした多様な企画が実施され、また、科学的内容に加え音楽やアロマを取り入れるなど世代を超えた関心を引いている。

とりわけ、教員経験者による学習指導要領に沿ったコンテンツ作成や、学校の希望に合わせた投影は重要な取り組みである。児童・生徒が通う学校の校庭の全方位風景をプラネタリウムに投影し、太陽や月、星空を観察できる「学校スカイライン」などは、地域に根ざした天体学習の優れた実践例であり、児童・生徒が実生活に近い形で学べる真正の教材と言える。

縄文文化などへの理解・関心の向上

「千葉市基本計画」（計画期間：令和5～14年度）では、「未来のまちづくりに向けた戦略的視点」として、「縄文から受け継ぐ『自然と共生する』精神を活かし、SDGs達成に向けた取組みの推進」が掲げられている。縄文文化の研究とその成果の発信を目的に策定された「特別史跡加曽利貝塚新博物館基本計画」では、「生きている縄文学び、体験し、考えるーそれは未来への道しるべー」を基本コンセプトに、国内最大級の貝塚という地域資源を活かした施設整備が進められている。

一方で、埋蔵文化財調査センターでは、遺跡の所在確認や発掘調査といった地道な研究活動を行っている。大型バス用駐車場を確保できない立地上の制約を補完するため、小学校や公民館に出向き、「土器触・講座」「火起こし」「勾玉づくり」「組紐作り」などの体験学習を出前授業として提供していることはセンターの研究活動を広く地域に還元する有意義な取り組みである。特に小学校社会科の縄文文化单元と連携し、多くの学校からの依頼を受けて出前学習を実施しており、身近な教材を通じて縄文文化への理解を深める機会を広く提供している点は高く評価できる。

千葉市の生涯学習行政は、幼児から成人まで、また縄文時代から現代の科学技術まで、多様な学習機会を市民に提供している。生涯学習は学習者の主体性と自発性に基づくため、受講者数が目標に届かない場合があっても、地道な広報活動は市民の意識啓発に意義がある。今後、新規に行われるチバリアフリーアートプロジェクト等の文化芸術事業やメディア芸術振興事業等も注目に値するところであり、引き続き市民の生涯学習の興隆のために、有意義な行政支援が行われることを期待する。